1　青年運動台頭の背景

（1）日本の青年運動と在朝日本人青年会

日本では明治維新以後、青年運動が本格的に台頭した。もっとも、明治維新以前の江戸時代においても青年団体と似た組織はあった。「若連中」「若者仲間」「若者組」などの名称を持つ青年層の組織が全国的に見られ、当時、これらの組織は祭りの実行役、婚姻の仲介役、そして村や町の権益や生活を守る警護や消防・難船救護・道普請・井戸掘・年貢の輸送などの力仕事を担っていた。当時の藩や幕府は、18 世紀後半以降、このような組織をある程度規制していたが、それは風紀紊乱、祭りの華美化、組織の徒党化などの問題が表面化したためである[2]。

明治時代に入り、近代化の先駆けとなった都市、とりわけ東京には地方から立身出世を夢見た多くの若者が集まってきた。これらの若者は学生や書生になったが、このような志を抱く若者は「青年」という新しい概念で括られるようになった[3]。その一方で、農村地域の「若連中」のような団体は次第に衰退していく。それは、従来この団体が担っていた夜警・盗賊の逮捕・騒擾の取り締まり・火の用心・消防・道路と橋梁の建設・祭りの実行などのような役割を次第に警察署・消防署・公共団体が果たすようになったからである[4]。このように「若連中」が担っていた役割が小さくなるにつれ、これらの団体がもたらす弊害も浮き彫りになっていった。青年が酒色にふけったり賭博にはまったり、血気にかられて村の中で乱暴を働いたり、村の長老のいうことを聞かなくなるなど、問題が生じた。そのような状況を受けて「若連中」の内部からも批判と改革の声が現れてくる。そして、「若連中」の青年や、あるいは地方の教育者と有志の主導によって改革が始まった。彼らはまず「若連中」という名称を「青年会」「青年倶楽部」に変更し、「青年夜学会」を設置した。当時登場した青年団体の名称は「社」・「会」・「青年会」・「青年団」などさまざまであった。こうした青年団体は、風紀の改善・陋習の矯正・知識の発達・青年の自覚促進・志気振起・農事改良などをその目的として掲げた。風紀の改善と革新が最も多かったが、それは青年団体のほとんどが「若連中」の改革運動から生まれたためであった。これらの青年団体は夜学会の開設・討論会と運動会の開催などの事業を展開した。その経費は会員が拠出する会費でまかなわれることが多かったが、会員の共同労働によって得た収入による場合もあった。青年会は初め村単位で組織されたが、次第にその範囲が拡大し、町村単位で設立されるようになった[5]。

このような中、日清戦争の最中の 1895 年 1 月、広島県沼隈郡の一青年である山本瀧之助は『田舎青年』という本を著し、自費出版した。「田舎青年」とは都市の学生・書生を

2　多仁照廣『青年の世紀』（同成社、2003 年）11 〜 13 頁。
3　同上、13 頁。
4　雄谷辰次郎『大日本青年団史』（（財）日本青年館、1942 年）49 頁。
5　同上、48 〜 74 頁。